

ニホンザル野外観察施設

加納隆至(施設長・兼)・東 滋・渡辺邦夫
足沢貞成¹⁾

本施設の運営は上記3教官のほか、和田一雄・鈴木 晃によって進められた。平成元年度の各ステーションの状況は次の通りである。

1 幸島観察所

幸島の群れは昭和23年以来の蓄積された資料をもとに野外観察施設の中では独自の位置を占めている。今年度は、宮藤(日本モンキーセンター)による群れの統合度の研究などが行われたほか、DNAフィンガープリント法による父子判定のための捕獲一斉調査が行われた。従来の幸島群の家系図は、観察から判定可能な母系によるもののみであったが、父系をも判定されることにより一層の研究の進展が期待できる。また、幸島の研究が始められてから40年近くになることから、記念誌の出版とパンフレット作成のための作業が進められた。今年も春から夏にかけて、島が堆積した砂によって地続きになり、サル番を出す日が多かった。また幸島対岸に作られた舟溜りの影響もあって、台風が数多く来たにもかかわらず、堆積した砂の量はあまり変わらなかった。従って日中に潮の低くなってくる翌年2月の時点ですでに長時間地続きになっており、平成2年度もサル番のために格段の努力が必要となろう。平成2年3月の時点での島内の個体数はマキグループ12頭を含め100頭であり、この10余年の間ほとんど変化していない。今年度の出産は11頭であり内6頭が死亡した。

2 下北研究林

1989年12月に、M, Ara群とI群由来の分裂群またはサブグループを対象に、個体数と構成を確認するための調査を行った(あしの会と共同)。構成については一部に不明な点は残ったが、群れ/サブグループの数と個体数については所期の成果を得た。1990年3月には西北域の旧Z群由来の群れの調査を材木川から古佐井川、そして大畑川流域でおこなった。積雪が少なく、群れの発見は困難で主として新しい痕跡に頼らざるを得なかった。古佐井川流域でZ群の存在を確認し、大畑川上流域をこの冬に利用した群れがないことを確か

めたにとどまった。また大畑川中流域には前報K群(恐山街道の群れ)のものと思われる採食痕が発見された。

野辺地町に移入されたタイワンザルの管理の問題は、新しく群れを離れたオスについては捕獲が行われたが、すでに下北半島に侵入した可能性があるハナレオスや母群の処置については未解決である。

3 上信越研究林

横湯川流域において、Seed Trapに入る果実量とその樹種毎の樹高・胸高直径分布から真の果実生産量を推定する作業を、10年間にわたって行っている。また、志賀A2・C群および雑魚川の群れの生態学的調査が続行された。1989年6月に長野市が1998年の冬季五輪に立候補することに閣議決定がなされた。招致委およびJOCは岩菅山にアルペン競技のうち滑降コースを新設することになっている。これは大幅な森林伐採がこの地域で行われることを意味しており、ニホンザルの生息環境悪化をくい止めるための現状調査を強めることにした。また当研究林近辺の各地でも、猿害を理由に大量のサル捕獲が進行しつつある。それをくい止めるために特に山の内町役場と協議している。

4 木曽研究林

この研究林が人里と接する地域では、近年有害鳥獣駆除としてのサル捕獲が続く、そのための対策をたてることが急務となっている。しかし、人手不足もあってなかなか有効な手だてが打ち出せない状態である。同様に研究林に接する木曾谷南部でも、いくつかの群れの捕獲がすでに進行している。より広域をカバーする地域個体群全体としての現状調査を行う必要があり、そのための方策が検討されている。

5 屋久島研究林

鈴木 滋(京大 理)とDavid Hill(京大 理 研 修 員)がHappa, Ark, 半山M群で主としてオスの社会関係についての研究をすすめた。夏季に増井, 好広(龍谷大), 黒木(泰星高校)らが瀬切川上流域の生態調査をおこなった。黒味川流域で大竹(JMC), 長井(産文研)が食性の季節変化を糞分析によって調べた。国割岳西斜面の国立公園第I種特別地域を貫通する西部林道(県道, 栗生-永田線)の延長13kmのうち瀬切川から3kmの区間の拡幅改修計画の環境影響追跡調査(モニタリング調査)が鹿児島県自然愛護協会の手によって行

1) 教務補佐員

われ、植生（一部）およびサルを分担した（山極、古市、東）。

このほか研究林各地およびその周辺の状況を大幅に変えてしまいかねないような出来事も多く、関係各省庁に以下のような要望を行った。

1) 下北半島のニホンザル生息地での青森営林局地域施業計画の策定にあたり、生息地の保全について研究所長名だ要望書を提出した。また野辺地で飼われていたタイワンザルが多数逃亡し、この地域に出没し始めた問題に関して、霊長類学会、青森、文化庁、環境庁に対し生態学的資料を提出し早急な対処方の要請を行った。日本生態学会から、大会決議として下北半島のニホンザルの保護対策についての要望書が関係官庁あてに提出された。

2) 屋久島では猿害対策としての有害鳥獣駆除のため、年間600頭にもものぼるサルが5年間も捕獲され続けている。その結果ヤクザルの総個体数は急激に減少し2000頭前後に落ち込んだものと推定される。屋久島研究グループは被害対策の見直しを含む総合的な対処を鹿児島県、環境庁およびIUCNに要請した。日本霊長類学会及び日本生態学会はヤクザルの保護及び有効かつ適正な猿害対策の採用について要請書を提出した。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

渡辺邦夫・山口直嗣²⁾・冠地富士男²⁾

従来からの継続として、ポピュレーション動態に関する資料を収集し、各月毎にはほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこったトピカルな出来事や通年の変化について分析をすすめている。

2) ニホンザルの国内全個体群に関するデータベースの作成

渡辺邦夫

種としてのニホンザルは、現在日本各地で猿害を理由とした大量の捕獲が行われており、生存の危機にたたされている。ニホンザルの総個体群に関する正確な資料を、組織的系統的に蓄積していくために、これまで各地で研究者が行ってきた調査結果をもとにした、データベース作成のための作業が行われた。

3) スラウェシマカクの種分化及び社会生態に関する研究

渡辺邦夫

インドネシアのスラウェシ島において、島内に生息する7種マカクについて、外形特徴の種内変異、その成長に伴う変化、種間雑種の有無などについての調査を行った。またムーアモンキーの個体識別に基づく個体関係の分析を続けている。

4) ニホンザルの社会生態学的、とくに自然群の環境利用と個体群の構造

東 滋

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れが示す生活と社会環境をとらえ、Survival conditionsをあきらかにするため、屋久島と下北半島西部の地域個体数について継続的な調査を行っている。

5) 下北半島西北部の群れの遊動に関する研究

足沢貞成

下北西北域のM、I、Z各群ともニホンザルでは有数の広大な遊動域をもつ。その生態学的条件や個体群内部の構造などに焦点を当てて調査を続けている。

論 文

- 1) Mori, A., K. Watanabe, & M. Kawai (1989) Longitudinal changes of dominance rank among the females of the Koshima group of Japanese monkeys. *Primates*, 30(2):147-173.
- 2) Watanabe, K. (1989) Fish a new addition to the diet of Japanese macaques on Koshima Island. *Folia Primatol.* 52: 124-131.
- 3) 東滋・伊藤徹魯・前田喜四雄・鳥居春巳・野崎英吉・青井俊樹 (1989) 根尾西谷川流域におけるツキノワグマの生態調査。クマ研究会会報 9: 3-20.
- 4) 東滋 (1989) ツキノワグマの個体数推定の検討。クマ研究会会報 9: 57-62.
- 5) ツキノワグマ研究会編 (1989) 「岐阜県におけるツキノワグマの生態調査報告書1973-1975 (復刻版)」
- 6) 足沢貞成 (1989) 下北西北地域のサルたちについての最近の状況。さるとひば. 3: 1-6.

報告・その他

- 1) Watanabe, K., & E. Brotoisworo (1990) Present situation of Sulawesi macaques. Kyoto Univ. Overseas Res. Rep., VII:
- 2) 渡辺邦夫 (1989) スラウェシマカクはいくつの種に分類できるのか—種分化と雑種形成の謎. モンキー, 227-228: 5-12.
- 3) 渡辺邦夫 (1989) 伊豆大島のタイワンザル—日本に住み着いた外国のサル. モンキー, 226: 4-7.
- 4) 渡辺邦夫 (1989) サルがものを洗うとき. ホームコロジ, 17: 6-10.
- 5) 渡辺邦夫 (1989) スラウェシのサルの来た道. アニマ, 207: 90-95.
- 6) 東滋 (1989) ヤクザルの現状. 自然保護, 326: 8-9.

学会発表

- 1) 東滋 (1989) ヤクシマザルの現状について—ひとつの亜種の絶滅をさけるために—, 哺乳類学会シンポジウム「有害鳥獣駆除と問題点」

サル類保健飼育管理施設

松林清明 (施設長・兼) ・後藤俊二・鈴木樹理・松林伸子¹⁾

この年度内に起きた事では、チンパンジーの脱出事件を落とすわけにはいかないであろう。1989年10月3日夕、ニホンザル高浜群の定期健康診断を終えた直後の第二放飼場から、チンパンジーのアイとアキラが出ているのが発見された。オランウータンのドゥドゥもケージから出ていたが、これは放飼場の廊下に留まっているところを戻された。アイは調理室を経て事務室に入っていたのを麻醉銃で射られて連れ戻された。残るアキラは、折り悪しく来合せていた近所の小学生3人を追って西側通用門から所外に出、中の1人に軽い外傷を負わせて行ってしまった。警察を始め所員で捜索が行われたが、結局アキラはその夜を研究所近くの山林で過ごし、翌日午後、あるお寺の別院に入り込んだところを麻醉銃で捕獲、連れ戻

された。

たまたま松林施設長が海外出張中で、施設長事務代理の竹中教授を中心に「対策本部」が設置され、捕獲作業の指揮や所外機関との連絡に当たったが、咬まれた小学生を始め近隣の市民には大きな迷惑と不安を与えた24時間であった。「対策本部」は引続き「対策会議」として存続し、原因究明と再発防止に努める一方、事務室を中心に被害者の通院治療の介助を続けた。

調査の結果、最初のスライドドアの南京錠が何らかの外力によって開いてしまい、あとの3ヶ所の錠はチンパンジー（恐らくアイ）が近くにあった鍵を使って開けたものと推測され、二度とこういうことが起きないように、計11項目にのぼる改善策が実行に移された。サル施設は研究所のサル類を安全に飼育する責務を負っているわけで、事態が予測困難なものであったとはいえ、鍵の管理法に不適切な点があったことは事実であり、強く反省しなければならない。今回の件で傷を負った小学生はじめ、研究所近辺の市民の方々には多大のご迷惑をおかけしたことを先ず深くお詫びしたい。そして再びこのような事が起きないように、動物飼育を担当する部署として決意を新たにしなければならない。

逃亡当日と翌日は、近在の動物園からの応援を含め、殆どの所員に総出でアキラの捜索、捕獲に協力して頂いた。事後処理については、所長、対策会議および事務室のご尽力のおかげで、予算を必要とするいくつかの再発防止策をも実施でき、また被害者との和解も成立して一応の決着をみるに至った。心からの感謝の意を表したい。

今回のチンプ事件では特に以下のような教訓を得た。記して参考としたい。1). 南京錠の性能を過信してはならない。構造的に意外な弱点を有している。2). チンプの知能、腕力、粘り強さ、いたずらっ気を過小評価してはいけない。ありとあらゆることを何度でもやる性質がある。3). マスコミを侮ってはいけない。取材に関する彼らの熱意、スピード、押しの強さは予想を越えるものがあり、対応を誤ると混乱に陥る恐れがある。取材には広報委員会に対応してもらうなど、窓口を整理する必要がある。4). 研究機関といえど、普段から近隣住民との融和を図って、良い関係を保つよう努力する必要がある。万一の時に協力してもらえるか否かの差は大きい。以上

1) 教務職員